

[F1] 福井謙一 『学問の創造』 (1987) 朝日文庫

第1章「学ぶこと思うこと」の中の「自然への憧憬」も印象に残りました。

奈良県と大阪府をまたいだ地域で育ち、自然観察があたえてくれる天与の自然認識、「所与性」、今の言葉で強いて言えば「アナログ的深さ」を心に刻みつつ育ったことが幸いであったこと — 子供は（ドリルに出てくる図形だけでなく）自然の中の際限ない美しさにふれるとよい —、そしてファールブルに憧れ、『昆虫記』を南仏の自然に想いを馳せながら繰り返し精読したという話、ファールブルと化学の出会いとは二つの失敗と関連していたという話：

— 最初は教師の実験の失敗（よし、自分で酸素を作れるようになるう）であり、二つ目は、彼の着眼と苦勞で後にアヴィニヨンの主産業にまで成長した「アカネの色素成分から染料を作る」会社がドイツでの人工合成の成功（化学の力）によってあっさり潰れてしまったという挫折 —

そして、それから立ち直るため、資金源として『昆虫記』の執筆を始めた、等々。

『昆虫記』でこの話を読まれた福井先生は、化学にたいする「憧れと反感」両方を深く感じたのだそうです。高校3年のとき親御さんが彼の将来の進路について以前からつてのあった京大の化学の喜多源逸先生に相談したら、数学が好きという話から「それなら化学をやらせなさい、自分のところで」と勧められた。化学は暗記科目という当時の認識を喜多先生も超えておられたのでしょう。本人はそれを聞いても判断に迷ったが、決め手は自然とファールブルだった、という話です。

引用した「手で覚える」は、第2章「学問を支えるもの」の中の「基礎学のすすめ」の中です。

この書物からはまた引用させていただくかもしれません。

**[M1] M. E. McIntyre “Science, Musik, and Mathematics
The Deepest Connections” (2022) World Scientific**

著者の専門領域の気象変動の話はこの最終章 “Postlude” で、特に勉強になりました。全般的には、かなり難解といえるでしょう。英語と日本語で各用語のカバー領域に「ズレ」があるのは当然ですが、ここでは豊富な語彙の縦横無尽な使用によって「かれら対われ」の相違が強調されています。

実は、この本は（1月20日伊原の書簡に続くミシマ社の広告で）ご紹介頂いた拙著

『文化の土壌に自立の根、音楽x知性、数学x感性など、越境自在な根の動きを追う』
(昨年末出版)とテーマ的に重なっており、この春それに気づいた共通の友人が知らせ
てくれたものです。

それにしても「The Deepest Connections」と言い切ってしまうとは！著者は玄人的
バイオリン奏者とのことで特に関心深く読みましたが、著者の「深部」とは主にパター
ン認識への神経反応系のことでした。和音の調和と音の振動数の簡単な整数比の関係の
説明などは、拙著ほど根本からでない（著者は流体力学、私は整数論だからでしょ
うか）ですし、個別な実例をもとにした拙著の方が楽しそうなのになあ。。。とつぶや
きました（私事ですみませんが、この本の副題を表示する以上、私には避け難いこと
で、ご容赦ください）。

なんと高踏的、でも分かるぞ、と最も感じさせてくれたのは第5章「科学とは何か」
"What is Science"の冒頭です。

「私はここで、科学の哲学に関するあれやこれやの書物全てを、ただの一つの簡単かつ
深淵な言明で、置き換えてお見せしましょう」

"So I'd like to replace all those books on the philosophy of science by one
simple, yet profound and far-reaching, statement"

思わず笑わせるところはジョークのセンスかも知れませんよ。まじめ人間優勢の日本
でこの雰囲気伝える和訳は、多分無理、無理。ところがその言明自体はいたって常識
的です——ただし（広い意味の）科学の研究にいそしんだ者にとっては、かな。科学を特
別扱いして差別する方々にこそ読んでほしいその言明とは：

「科学は通常の perception の延長である」

(perception の標準訳としては『知覚、認知、[鋭い]理解[力]』岩波国語辞典第8版)

"Science is an extension of ordinary perception"

この著者のいわんとすることは非常によくわかる気がします。

[K1] R. カッシングー『藻類』（井上勲 訳）（2020）築地書館

まず本書の意図を知るため、第5章「夢の燃料、藻類オイル」よりの抜き書きを。

——人と物の輸送は世界のエネルギー消費全体の約25パーセントを占めている。2008
年、テキサス州のバイオ燃料会社〇〇を訪ねたとき私はこの本を書くことを思いついた
(中略) これらの企業の背後にある基本的な概念が理にかなっていた。元をたどれば、
石油は何百万年もの間、地下で押しつぶされていた藻類の死骸である。それなら、なぜ
そのプロセスを加速して、現在生きている藻類からオイルを作らないのか？ 化石オイル
を地下から汲み上げて大気に二酸化炭素を放出する代わりに、藻類を育てて大気中から
二酸化炭素を除去することができるではないか。——

読みやすく、身近な話題から世界規模の話に迄グイグイ引き込まれる名著だと思えます。流石ルポライターで、インタビュー相手の風貌の描写や自分が海に潜るときのおっかなびっくりについても、面白おかしく描かれています。随所で目からウロコのミニ知識も。たとえば、

東京湾の海苔生産が戦後一時さっぱりになった原因が、実は海苔は成長過程の一時期を牡蠣殻で過ごす（英国の女性科学者が発見）のに、米軍の空襲で海底の環境が変わり牡蠣が壊滅していたこと、

「海藻類の食はヨードや ω -3 脂肪酸摂取など知能の発育に欠かせないから海岸沿いの民族が生き残ったのであろう」

という学説の紹介、海苔産業の中心が日本から韓国に変わったわけ、磯の香の実体は？あのヌメヌメは海面に浮く藻類の UVケア用「クリーム」だった、等。和訳も名訳。たとえば：

シェイプ・シフター を 変化妖怪（ヘンゲヨウカイ）と。

[P1] Judea Pearl & Dana Mackenzie “The Book of Why ; The New Science of Cause and Effect” (2018) Penguin Science

[M1]の引用文献で見つけました。以前の書簡で触れたこともあり、次回あたりでも、と思いますので追加しておきます。面白い！が難解でまだ勉強中です。とりあえず2つの章だけ。

第1章 The Ladder of Causation

見るだけ、やってみる、その逆だったと空想してみる
の3段の「因知」の「はしご」。AIは「未来の神」どころか「1段目止まり」という、AI開発にも携わってきた著者たちの意見も、はっきり書かれています。

第5章 The smoke-filled debate: clearing the air

タバコと肺がんの相関関係の研究と議論の歴史。肺がん患者は大部分が愛煙家、でも愛煙家は肺がんになるとは限らない、。。。

では。。。？

「通常の疫学検査は無理。長期間連続して一定量タバコを吸い続け30年後にどうなるかを調べるための『ボランティア』が、もし北朝鮮以外の国にもいたら驚くだろう」といったくだけた調子で書かれています。